

2016年箱根忘年山行報告（平成28年12月10日（土）－11日（日））

今年もあつという間に12月になり恒例の忘年山行の時期になった。昨年は日帰りで済ませてしまったが、やはり1泊でじっくりと親睦を深めたいという声が強かった。そこで、今回は久しぶりの箱根に泊まるプランを考え、金時山と湯阪路を歩くことにした。三浦さんに丸投げで宿を探していただくと10名の参加希望が集まった。大勢の参加で喜んだが、直前になり三浦さんの入院による不参加があり、やや寂しい忘年山行となった。

10日（土）、8時05分発小田急バスに乗ろうと新宿バスタに集合したのは、青柳、天野、伊藤、小澤、後藤の5名である。今日は保証付きの快晴、なんとといっても青柳・天野連合軍のお出ましである。御殿場付近では雲一つない青空の下に大きな富士山がくっきりと見えている。渋滞はなかったが、多くの乗客が乗り降りしたためか、乙女峠バス停には少し遅れて10時20分ごろ到着したが全く問題ない。というのは本日宿泊予定の旅館は、15時前はチェックインさせてくれないので、それ以降に着かなければならない。コースタイムが3時間程度なので、昼食の1時間を入れてもかなりゆっくり歩く必要がある。

バス停の反対側にはドライブインがあるので、ここでトイレを拝借する。女性用は混雑して列ができていたが、このお店は嫌な顔一つしない。申し訳ないので、お土産代わりにお菓子を購入した。さて、それではボチボチ出発しましょうか、と35分にゆっくりスタートする。樹林帯の中の暗い道をゆっくり歩いて、ときどき後ろから追い越される。先頭を務める小澤さんには、「山頂に着くまでに100人抜かれること」と厳命したが、さすがに無理であった。ゆっくり歩いてもコースタイムはあまり変わらず、11時20分乙女峠に着いた。

峠には茶屋があるが営業はしていないようだ。展望台から富士山を眺めると、なんということでしょう、すでに雲の中に隠れている。青柳・天野連合軍に伊藤が一矢報いたのだ、などと言っても富士山が見えないのはさみしい。とりあえずすぐ上のテーブルで一休みすると、反対側の箱根の山はよく見えている。ゆっくり上ったとはいえそれなりに汗をかいたし、風がない場所では日差しが強い。このまま下ればすぐにビールが飲めるよと言うと、後藤さんは思わず本気になったようだ。5人が口裏を合わせて山頂に行ったことにすれば問題ない、という提案に後藤さんは目を輝かせたが、頑張っ山頂を目指すことにした。

ここからは長尾山までだらだらとした登りなのだが、思ったよりも時間がかかる。もっと近かったような気がしたが、昔の記憶はいい加減だねと言いつつ山頂らしからぬ長尾山に着いた。この後は一旦下って又登るのだが、小澤・天野チームは我慢できずに普通のペースで先に行ってしまった。我々はペースを守って12時50分に金時山山頂に着いた。

予想はしていたが、金時山の山頂は大混雑であった。足の踏み場もないとはこのことで、老若男女が行きかっている。大きな山頂標識の周りには大勢が群がって次から次へと記念写真を撮っているが、背景の富士山は完全に雲の中である。おまけに我々の頭上には黒い雲がかかりだした。何とか場所を探してお昼にするが、天野さんは山頂の茶屋で暖かいそばを頼んで食べている。冷たい風が強くてあまりじっとしてられないし景色も良くない

ので、「金時娘！」をチラ見して 13 時 30 分に下山することにした。

山頂も混雑していたが、下山路も混雑している。何組かに分かれた団体があちこちで地形や景色を説明するたびに前がつかえる。この時間なので登ってくる人は少ないが、それでもたまに来る人とのすれ違いは時間がかかる。普通ならイライラするところだが、本日は寛容でもっと遅くなってもいいくらいである。尾根を下りだすと周囲が明るくなり、箱根方面が開けてくる。ゆっくり下っても 14 時 15 分にうぐいす茶屋に着いてしまった。

この茶屋は開いているのを見たことが無いのだが、本日はどういうわけか営業中であった。背の高い箱根笹の空き地にリュックを置いているうちに、天野さんの姿が見えなくなった。間もなく、「これもらっちゃったんで、みなさんどうぞ」とオデンを持ってきた。なんと、250 円で日本酒と焼き鳥 2 本、おでん 6 本付きとのこと。山行中はアルコール禁止のはずであったが、味噌こんにゃく 1 本のわいろでウヤムヤになってしまった。おいしくおでんをいただいて 14 時 40 分に出発、15 分で登山口に着いた。その先で国道に出て、近くのコンビニでアルコールを少々調達し、15 時 15 分民宿「せりざわ荘」に着いた。

宿に着くと、荻野さん、早坂さん、陽田さんは既に来ていて感動の再会となった。2 年前の事故以降初めて会う人もいたし、後藤さんも夏以来である。積もる話は山ほどあるが、まずはお風呂に入って汗を流し、ビールで乾杯した。陽田さん提供の白ワインに、後藤さんの上高地土産のお酒にワインも出てきて、天野さんは孤軍奮闘したが飲みきれなかった。さらに全員で持ち寄ったおつまみが山のように出て話は弾むのであった。

久しぶりなので四方山話は尽きないが、酔っぱらう前に 12 月の例会を開催する。まずは青柳さんが恐れている勤務評定から始まり、今後の山行、わが会の将来像など話しているうちに夕食の時間となった。18 時からの夕食は宴会場で向かい合って食べる。食事は豪華ではないが十分おいしかった。久しぶりに荻野さんの「おいしい！」を聞いて、再開を実感したのであった。宴会場にはカラオケもあったが、三浦さん抜きではいまいち盛り上がり欠けた。それでもそれなりに話は盛り上がり、最後に「男はしょせんバカなのよ」と早坂さんから一喝されて馬鹿な男どもは反省させられてしまった。20 時 30 分ごろお開きとし、その後風呂に入ったりそのまま寝たりと各自明日に備えたのであった。

この宿は値段の割に食事も悪くないし、お風呂も広くて快適、部屋もきれいなのだが、いまいち好きになれなかった。その最大の理由はあまりにも事務的でホスピタリティが無いことである。たとえば、チェックインは 15 時となっているが、それまでは玄関が開かず荻野さんたち先着組は外で待たされた。またどういう訳かスリッパが無く、洗面所とトイレにだけあるのでつい間違えて履いたまま出てくると怒られる。お風呂は 22 時 30 分までしか入れないし、食事も時間厳守で、宿の都合に合わせて客が対応させられる気分になる。人手が少ない（親子 2 人でやっているみたい）中で、低価格となれば合理化を図るのもしようがないのかもしれないが、どうも落ち着かなかった。

さて翌 11 日（日）、朝はお風呂に 6 時から入れるので、ぜいたくに朝風呂を楽しみ、7

時から朝食をとる。朝食もおいしかったが、お風呂に入って少し遅れた後藤さんは「40分までに食べてください」と叱られていた。朝食後8時20分くらいに宿を出てバス停に向かう。実は朝タクシーを頼んだのだがどこも空車が無いと断られてしまったのだ。日曜日の朝なので需要は多くなくては困るが、12月の箱根は大繁盛のようである。

さて、8時37分発のバスで小田原方面に向かい、途中でバスを乗り換えるが、ここで天野さんとお別れした。天野さんは日本酒とビールを飲みすぎて痛風が出てしまったため本日の山は不参加としそのまま帰京したのであった。さて、去る人もいれば来る人もいる。9時08分に着いた「湯坂路入口」バス停で、神田玲子さんが合流、またも感激の再会となった。神田さんは都合で宿泊はできなかったが、本日早起きして参加してくれたのである。

全員集合したので、9時10分に出発、ほとんど高低差のない気持ちの良い広い道を進む。今回は久しぶりの人がいたので、登りのほとんどないこのコースに変更した。実はこれは青柳さんのアドバイスによるもので、青柳さんも副会長の自覚が出たようで喜ばしい。皆で話しながらブラブラ歩くと、すぐに本日の最高地点である鷹巣山に9時34分に着いてしまった。記念写真を撮った後一旦下り、少しだけ上って10時13分浅間山に着いた。

今日も快晴で暖かく汗をかいたので、早坂さんと後藤さんはビールを持ってこなかったことを後悔したのであった。降りたら飲ませてあげるからねとなだめ、あとはひたすら下る。ここからはほぼ下りだが、正確には99%と言っておかないとほんの少し上りの箇所もある。広い尾根道は両側のススキがきれいに刈り込んであるが、防火帯になっているかららしい。落ち葉を踏みしめながら歩いていると、葉の小さなもみじが残っていた。下に行くほど赤いきれいなもみじが残っている。さすがに遅めだが、2週間くらい前ならきれいであつたらう。と、もみじを見ていると、なんと雨が降ってきた。

そのうち止むだろうと思っていたらどんどん降ってくるのであわてて雨具を着用した。「私がいなくてこれですよ」という天野さんの声が聞こえたような気がしたが、濡れた足元は注意しなければならない。そのうちに下が石畳になり、よけい滑るようになってきた。湯坂城跡からは急な傾斜の道を滑りながら下って12時46分国道1号線に降り立った。

予定していた蕎麦屋は大行列なのであきらめ、箱根湯元駅前の店を探すがいずれも満員である。しょうがないので、小田原なら店も多いだろうと、小田原駅前の「魚国」に行った。多少混んでいたが、20分くらい待って入店できた。お待ちかねのビールでのどを潤し、おいしく刺身などを食べて歓談し、14時30分ごろ解散した。帰りの小田急線から外を見ると、青空が一杯に広がっていた。

今回は2年ぶりに宿泊を伴った忘年山行であったが、久しぶりの人も含め大勢参加いただき楽しい会となった。三浦さんの不参加が残念であったが、早く全快してご参加いただきたい。来年も皆さんと元気に山に登り、温泉と酒を楽しみたいものである。本当に今年一年ご参加ありがとうございました。そして来年もよろしく願います。

(伊藤)